

外部が見える開口部をもつ展示空間の研究
1990 年以降に建設された美術館を通して
Exhibition space research in view of the external opening
Through the museum was built in 1990

○堀内里菜¹ 佐藤慎也²

Rina Horiuchi, Shinya Satoh

Recently, the advent of site-specific works of art to emphasize. The museum's exhibition space, while at the internal "external environment" is considered to be one of the spatial planning approach can also be connected with the exhibition. Providing an opening in the wall of the room is "visually connect with the external environment while still in the room" can be realized. By focusing on the analysis of external environment and from there see the shape of the opening of the exhibition hall, which aims to clarify the design approach of the opening end of the exhibition hall of the museum in recent years.

1. 研究目的

近年、「開かれた美術館」という言葉をよく耳にするようになった。それは、誰もが気軽に利用でき、美術に親しめる環境である。建築においても都市に対して美術館を開く計画が導入されてきている。

一方、美術館の展示室においては、20 世紀に入ると、出来るだけニュートラルな状態を目指した空間が多く作られるようになった。しかし、作品の表現形態や展示空間の多様化により、美術のサイトスペシフィックな性格は強められていった。美術を展示する際に、どういった空間に置くか、ということがいっそう丹念に考えられるようになってきている。美術館の展示空間においては、内部にしながら「外部環境」と繋がる事が出来ることも展示空間計画の手法の一つであると考えられる。

展示室の壁面に開口部を設けることは、自然光のみを目的とした天窓では担いきれない「室内にしながら視覚的に外部環境と繋がること」を実現できる。そのため、美術館の展示空間を考察する上で、「開口部」の検討は重要である。展示室の開口部の形状とそこから見える外部環境に着目し分析することで、近年の美術館の展示室における開口部の設計手法の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 研究概要

2-1. 研究方法

近年の美術館建築の傾向を把握するため、1990 年以降に建設された、国内の美術館の展示室内にある、内部から外部を望むことの出来る開口部のみを対象とする。エントランスホールなど展示室外であれば、作品が設置されている場合も対象から除く。尚、1990 年以降の国内の美術館とは、1990 年以降の「新建築」に掲載されている主要用途が「美術館」と表記されているものとする。

以上の条件を満たす美術館施設を挙げ、文献調査から「開口部の形状」と「外部環境」の分析を行う。主要文献には、「新建築」を使用する。図面と写真から「壁面に透明な開口部をもつ展示室」を抽出し、それ以外の展示室は除外する。図面から開口部の存在が把握できた展示室は、文献や訪問調査より、確実に外の景色が見えると判断できるもののみを対象とする。そして、図面と写真、配置図から、開口部の形状、外部環境の分類を行う。それら相互の関係性や、年代別による流れを考察し、美術館の展示室における開口部の変遷を考える。

2-2. 分類

2-2-1. 開口部の形状の分類

開口部の形状の印象は、「1 壁面に対する開口部の形状」に加えて「開口部が設けられている壁面数」が左右していると考えられる。そこで、「1 壁面に対する開口部の形状」を 5 種類に、「開口部が設けられている壁面数」を 1~4 面の 4 種類に分類する。その分類を表 1 に示す。

表 1 1 壁面に対する開口部の形状の分類

a	全面開口	1 壁面に対し、50%以上 100%以下の面積を占める開口部。
b	部分開口	1 壁面に対し、0%より大きく 50%未満の面積を占める開口部。目線上にある開口部のみを対象とする。
c	上部開口	目線より上に位置する開口部。
d	下部開口	目線より下に位置する開口部。
e	ルーバー開口	目線上にあるが、近距離でなければ外の景色を見ることが出来ない開口部。

2-2-2. 外部環境の分類

外部環境を、12 要素に分類する。その分類を表 2 に示す。ここで示す「空」は、外部に見える景色が「空のみ」の開口部が該当する。外部環境が複数の要素で構成されている開口部に関しては、それら全ての要素を抽出する。

表 2 外部に見える景色の分類

i 草木	ii 壁	iii 美術作品	iv 建物	v 山	vi テラス・コート
vii 庭	viii 池・水盤	ix 道路	x 公園	xi 海・川	xii 空

3. 研究結果

3-1. 美術館建設数の集計

研究対象となる美術館数を図 1 に表す。図 1 から 1998 年以降、美術館の建設数が減少傾向であることが分かる。

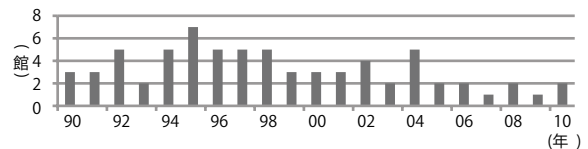


図 1 研究対象となる美術館数

3-2. 開口部の形状

開口部の形状を集計した結果を図 2 に示す。集計は、展示室数で行う。結果は、全面開口は全体の約 60% となっている。また、

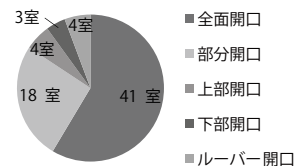


図 2 開口部の形状の割合

¹ 日大理工・院・建築
² 日大理工・教員・建築

¹ Graduate Student, Graduate School of Sci. & Tec., Nihon Univ.
² Assist. Prof., Dept. of Architecture, Coll. of Sci. & Tec., Nihon Univ., Dr. Eng.

開口部が設けられている壁面数が 1 面の開口部に着目すると、全面開口が 49%、部分開口が 18%となった。全体の傾向として、開口部が設けられている壁面数が 2 面以上になると、展示室数は極端に減少することが分かる。次に、図 3 から部分開口は、年々減少傾向にあることが分かる。近年減少傾向である美術館数に対し、全面開口の展示室数は変動が見られないことから、新建築に掲載された美術館に対する全面開口の割合は増加傾向にあると言える。

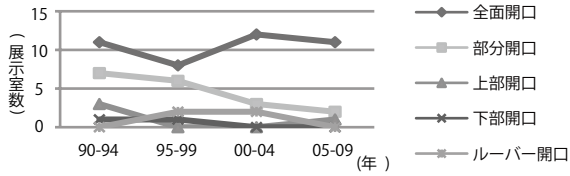


図 3 開口部の形状の推移

3-3. 外部環境

開口部から見える外部環境を集計した結果を図 4 に示す。さらに、外部環境を年代別に比較した結果、年代による傾向は表れなかった。

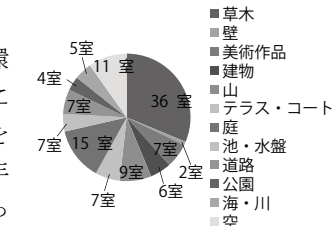


図 4 開口部から見える外部環境の割合

3-4. 開口部の形状と外部環境の関係

上部開口や下部開口、ルーバー開口は対象となる事例が少ないため、以後、全面開口と部分開口に関してさらに考察を進めていく。図 5、図 6 から、開口部の形状と外部環境が直接結びつくものではないということが分かる。これは、外部環境は開口部の形状によらず、その土地に依存したものを示す傾向が強いからと考えられる。土地に依存した外部環境と繋がることは、サイトスペシフィックな美術作品が出現している今、注目すべき点であると考えられる。

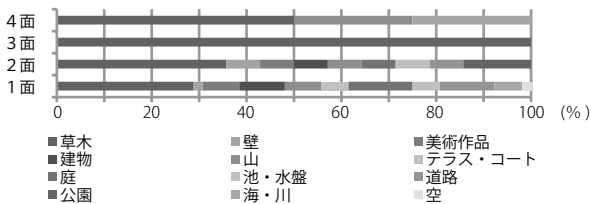


図 5 全面開口の壁面数別外部環境の割合

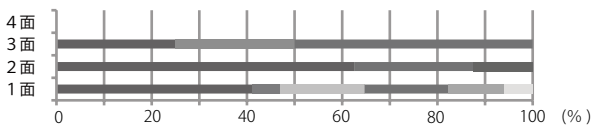


図 6 部分開口の壁面数別外部環境の割合

3-5. 開口部の形状と視線の抜けの関係

開口部の形状と外部環境における視線の抜けの関係を示す。写真を元に、視線の抜けを表 3 に示す 2 通りに分類した。3-4 同様、全面開口と部分開口に関して考察を行う。

表 3 外部環境における視線の抜け

i	視線が抜ける	視界が妨げられず、先を見通せる
ii	視線が抜けない	高い草木、囲いや塀、コートの壁などにより、先を見通せない

まず、全面開口の 1～4 面において、視線が抜ける結果

となった開口部は 5 割を超えた。また、部分開口では 3 面を除いて、視線が抜けない結果となった開口部は 5 割を超える結果となった。全面開口と部分開口を比較すると、視線が抜ける結果となった開口部の割合は、全面開口が 7 割、部分開口が 5 割弱である。つまり、視線が抜ける外部環境には全面開口が計画されることが多いことが分かる。

さらに、全面開口と部分開口それぞれにおける年代別の視線の抜けを考察する。図 7 から全面開口、部分開口ともに視線が抜ける外部環境をもつ割合は、1999 年以降増加していることが分かる。

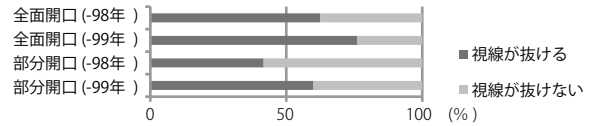


図 7 年代別開口の視線の抜け

4. 考察

研究を通して、近年開口部の形状において全面開口の割合が増加傾向にあること、視線が抜ける外部環境のある方向に計画される開口部が増加傾向にあることが分かった。一方、外部環境に関しては、各々の土地に依存したものが多く見られた。

上記の視点から、以前はニュートラルさを保ちながらも開口部を設けていたのに対し、近年は開口部を積極的に設けた「開放的な展示空間」が増加している傾向にある。これは、背後にある美術の表現形態の多様化が強く影響していると考えられる。現代美術が誕生する以前は、展示室内に展示する作品が大半を占めていたため、ニュートラルな展示室が追求された。しかし、サイトスペシフィックな性格の強いランドアートやパブリックアートなど外に展示される美術作品が生まれた今、場所性が重要視されるようになり、外部環境と一体となる試みを行う展示室が増加しているのだと考えられる。その一つの形として、「外部環境と繋がりのある展示空間」が生まれ、その条件を満たす開口部が設けられるようになったのだろう。

【参考文献】

- 1) 半沢重信：博物館建築 博物館・美術館・資料館の空間計画，鹿島出版会，1991 年 7 月
- 2) 並木誠士・中川理：美術館の可能性，学芸出版社，2006 年 08 月
- 3) 太田泰人+渡辺真理+水沢勉+松岡智子：美術館は生まれ変わる | 21 世紀の現代美術館，鹿島出版会，2008 年 09 月
- 4) 暮沢 剛巳：美術館はどこへ？，廣済堂出版 2002 年 09 月
- 5) ミミ・ザイガー：ニュー・ミュージアム 現代美術・博物館建築の旅，鹿島出版会，2007 年 4 月
- 6) K・シュバート：進化する美術館-フランス革命から現代まで，玉川大学出版部，2004 年 11 月
- 7) 建築設計資料 49 美術館 2-文化の時代にふさわしい活動の場，建築資料研究社，1994 年 12 月
- 8) 建築設計資料 102 美術館 3-多様化する芸術表現、変容する展示空間，建築資料研究社，2005 年 9 月
- 9) GA JAPAN 東京 A.D.A. EDITA Tokyo, 1995 年 3 月
- 10) 新建築，新建築社，1990 年 1 月号～2009 年 12 月号
- 11) 安田幸一、鷹野雄太：美術館の開口部から見える風景，日本建築学会大会学術講演梗概集（関東），2006 年 9 月